モネ

MONET

連作の情景

Claude Monet: Journey to Series Paintings

プレスリリース

PRESS RELEASE

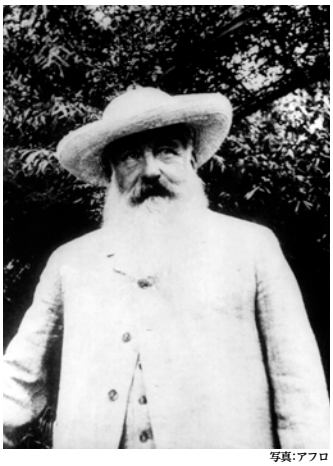
〈ルーヴル河岸〉(部分) 1867年頃 油彩、カンヴァス 65.1 × 92.6cm デン・ハーグ美術館　© Kunstmuseum Den Haag - bequest Mr. and Mrs. G.L.F. Philips-van der Willigen, 1942

ごあいさつ
GREETING

印象派の代表的な画家のひとり、クロード・モネ（1840-1926）は、自然の光と色彩に対する並外れた感覚を持ち、柔らかい色遣いと温かい光の表現を得意とし、自然の息遣いが感じられる作品を数多く残しました。同じ場所やテーマを一つの対象として着目し異なる天候、異なる時間、異なる季節を通して一瞬の表情や風の動き、時の移り変わりをカンヴァスに写し取った「連作」は、巨匠モネの画業から切り離して語ることはできません。移ろいゆく景色と、その全ての表情を描き留めようとしたモネの時と光に対する探究心が感じられる「連作」は、モネの画家としての芸術的精神を色濃く映し出していると言えるのかもしれません。

1874年に第1回印象派展が開催されてから150年の節目を迎えることを記念し、東京と大阪を会場に国内外のモネの代表作60点以上＊が一堂に会す本展では、モネの代名詞として日本でも広く親しまれている〈積みわら〉〈睡蓮〉などをモティーフとした「連作」に焦点を当てながら、時間や光とのたゆまぬ対話を続けた画家の生涯を辿ります。また、サロン（官展）を離れ、印象派の旗手として活動を始めるきっかけとなった、日本初公開となる人物画の大作《昼食》を中心に、「印象派以前」の作品もご紹介し、モネの革新的な表現手法の一つである「連作」に至る過程を追います。展示作品のすべてがモネ作品となる、壮大なモネ芸術の世界をご堪能ください。　＊東京展、大阪展で出品作品が一部異なります

クロード・モネとは



写真：アフロ

Claude Monet
クロード・モネ

印象派を代表する画家。1840年11月14日、パリ9区に生まれる。家族の転居に伴い5歳頃からル・アーヴルで暮らす。風景画家ブーダンの助言により戸外で風景画を描き始める。18歳でパリに出て、画塾でルノワールら仲間と出会う。1865年、サロンに初入選し、尊敬するマネに「水のラファエロ」と呼ばれる。その後はサロン落選が続き、経済的に困窮する。普仏戦争を機に妻子を連れてイギリスとオランダに滞在。1874年、第1回印象派展を仲間とともに開催。国内外を旅して各地で風景画を精力的に描く。1883年よりセーヌ川流域のジヴェルニーに定住。1880年代後半から自宅付近の〈積みわら〉を「連作」として描き始め、この頃から旅先での制作も「連作」の兆しを見せる。1891年、デュラン=リュエル画廊で〈積みわら〉の連作15点を公開。この個展が評判を呼び、フランスを代表する画家として国内外で名声を築く。連作はその後〈ポプラ並木〉、〈ルーアン大聖堂〉、〈セーヌ川の朝〉、ロンドンやヴェネツィアの風景、〈睡蓮〉などのテーマに及ぶ。晩年の制作は〈睡蓮〉が大半となり、眼を患いながら最晩年まで描き続けた。1926年12月5日、ジヴェルニーの自宅で86歳にて死去。ライフワークだった〈睡蓮〉の大型装飾壁画はフランス国家に遺贈される。後半生の作品はカンディンスキーや抽象表現主義の画家たちに影響を与え、モネの再評価につながった。「モネはひとつの眼にすぎない。しかし何という眼なのだろう！」というセザンヌの言葉が有名。

みどころ
HIGHLIGHTS

みどころ1

モネの連作絵画に焦点を当てた展覧会

戸外制作時に見られるモティーフの一瞬の表情や風の動き、時の移り変わりに着目したモネは、
同じ場所やテーマを異なる天候、異なる時間、異なる季節を通して描き、
「連作」という革新的な表現手法により発表しました。
本展では、モネの代名詞として日本でも広く親しまれている「連作」に焦点を当てながら、
時間と光とのたゆまぬ対話を続けた画家の生涯を辿ります。

〈ウォータールー橋〉

ウォータールー橋、曇り
1900年 油彩、カンヴァス 65.0×100.0cm ヒュー・レイン・ギャラリー
Collection & image © Hugh Lane Gallery, Dublin (Reg. No. 304)

ウォータールー橋、ロンドン、夕暮れ
1904年 油彩、カンヴァス 65.7×101.6cm ワシントン・ナショナル・ギャラリー
© National Gallery of Art, Washington, Collection of Mr. and Mrs. Paul Mellon, 1983.1.27

ウォータールー橋、ロンドン、日没
1904年 油彩、カンヴァス 65.5×92.7cm ワシントン・ナショナル・ギャラリー
© National Gallery of Art, Washington, Collection of Mr. and Mrs. Paul Mellon, 1983.1.28

みどころ2

100%モネ!! 展示作品のすべてがモネ
世界各地30館以上から代表作が来日

印象派を立ち上げる以前のモネは人物画も多く手掛けていました。
本展は、日本初公開となる人物画の大作《昼食》を中心にした「印象派以前」の作品から、
〈積みわら〉や〈睡蓮〉などの多様なモティーフの「連作」まで、
展示作品のすべてがモネ。“100%モネ”の贅沢な展覧会です。
世界各地30館以上から集められた代表作を堪能できる、またとない機会となります。

みどころ3

印象派の誕生(1874年)から150年を迎える節目の展覧会

モネは、当時フランスの画家にとってほぼ唯一で最大の作品発表の機会だった、
国が主催する公募展であるサロン(官展)から距離を置き、
新たな発表の場として仲間たちとともに1874年4月に第1回印象派展を開催しました。
本展は、「印象派」の誕生から150年目を迎えることを記念して開催される展覧会です。

第１章
CHAPTER 1

印象派以前のモネ
Monet, His Early Works

パリで1840年に生まれたモネは、5歳から18歳までの成長期をフランス北西部のル・アーヴルで過ごします。学校の勉強は嫌いでしたが、素描を習得し、描き始めた似顔絵（カリカチュア）が地元で評判を得ました。そんなモネは17歳で風景画家ブーダン（1824-98）と出会ったことで運命の転機を迎えます。ブーダンはモネを戸外のスケッチに誘い、風景を描くことに開眼させたのです。ブーダンとモネの親交は生涯続きました。

画家を志したモネは18歳でパリに出ます。アルジェリアで一年余の兵役を務め、この頃オランダの画家ヨンキント（1819-91）にも影響を受けています。パリで絵の勉強を続け、画塾で出会ったピサロ（1830-1903）やルノワール（1841-1919）、シスレー（1839-99）、バジール（1841-70）と親交を深めました。

当時フランスの若い画家にとってサロン入選は唯一の登竜門で、モネは1865年に2点の海景画でサロンに初入選します。翌年も、のちに妻となるカミーユ（1847-79）をモデルにした《カミーユ（緑衣の女性）》と風景画が入選。順調なデビューを飾り、ゾラ（1840-1902）が好意的な美術評論を書き、マネ（1832-83）にも注目されました。しかしその後、戸外で描いたモネの意欲作を保守的なサロン審査員の多くは評価せず、1867年以降は落選を重ねました。

1870年7月に普仏戦争が勃発すると、徴兵を逃れるためモネは妻子とロンドンへ避難します。翌年に休戦すると、オランダ滞在を経てパリに戻りました。本章ではサロンに落選した初来日の大作《昼食》を中心に、オランダで描いた風景画などモネの初期作品をご紹介します。

ルーヴル河岸
1867年頃 油彩、カンヴァス 65.1×92.6cm デン・ハーグ美術館
© Kunstmuseum Den Haag - bequest Mr. and Mrs. G.L.F. Philips-van der Willigen, 1942

1867年春、モネが許可を得てルーヴル宮殿の東ファサードから見下ろして描いた作品と考えられています。カンヴァスの上半分を空が占め、下半分はルーヴル河岸（ルーヴル通り）を往来する馬車や人で賑わいます。セーヌ川を挟んだ遠方のパリ左岸にはパンテオンのドームが見えます。伝統的な様式で描かれた、モネには珍しい都会の風景です。

第１章
CHAPTER 1

昼食

1868-69年 油彩、カンヴァス 231.5×151.5cm
シュテーデル美術館

© Städel Museum, Frankfurt am Main

食卓に座るのは、後に結婚するカミーユと息子のジャン。幸せそうな2人を見守る来客の女性と、様子をうかがう女中の姿もあります。プライベートな情景をモネは高さ230cmを超える大きなカンヴァスに描きました。周到に準備した意欲作でしたが1870年のサロンに落選。希少な「モネの黒」を味わえる初期の代表作は今回が初来日です。

ザーン川の岸辺の家々

1871年 油彩、カンヴァス 47.7×73.7cm
シュテーデル美術館

© Städel Museum, Frankfurt am Main

第 2 章
CHAPTER 2

印象派の画家、モネ
Monet, the Impressionist

オランダから帰国したモネは、1871年末からパリ郊外のアルジャントゥイユで暮らし始めます。マネやルノワールも風光明媚なこの地を訪れてモネと一緒に制作しました。ロンドンで知り合った画商デュラン=リュエル(1831-1922)がモネの絵を買い始め、束の間の満ち足りた生活を送ります。

モネと仲間たちはサロン落選の経験から新たなグループ展を構想し、やがて1874年春、パリで第1回印象派展が開催されます。1886年までに計8回開催された印象派展にモネは5回参加しました。第2回印象派展には和服姿の妻をモデルにした《ラ・ジャポネーズ》(1876年)を発表しますが、人物画の制作は減り、風景が主題となります。モネが好んだのは、刻々と近代化する都会の街景よりも、自然の情景、とりわけ水辺の景色でした。

フランスでは1871年に普仏戦争が終わると好景気に沸きますが、1875年、急激な景気後退が始まります。絵が売れなくなり、最大の顧客だった実業家エルネスト・オシュデ(1837-91)は破産し、モネは深刻な経済難に直面します。1878年にはヴェトゥイユへ移り、生活費節減のためオシュデ家(夫婦と6人の子)とモネ家(夫婦と2人の子)の同居が始まりました。1876年頃から体調を崩し始めたカミーユは1879年9月に32歳で病没。モネは最良のモデルでもあった妻を喪い、深刻な精神的危機に陥りました。

本章では、1870年代から80年代にかけて、セーヌ川流域を拠点に各地を訪れたモネの作品を展示します。アトリエ舟で自在に移動し、戸外で制作した印象派らしい多様な風景画をご覧いただきます。

ヴェトゥイユの教会
1880年 油彩、カンヴァス 50.5×61.0cm
サウサンプトン市立美術館
© Southampton City Art Gallery

パリから北西に60kmほど離れたヴェトゥイユを、セーヌ川に浮かべたボートの上から描いています。教会を中央に据えたヴェトゥイユの街並みの下には、緑の土手とボート遊びに興じる人々が描かれ、それらと空を映し出した川面が画面の下半分を占めています。モネは揺らぐ水面への映り込みを見えるがままに描写しようと試み、短い筆致で軽くたたくように筆を運んでいます。

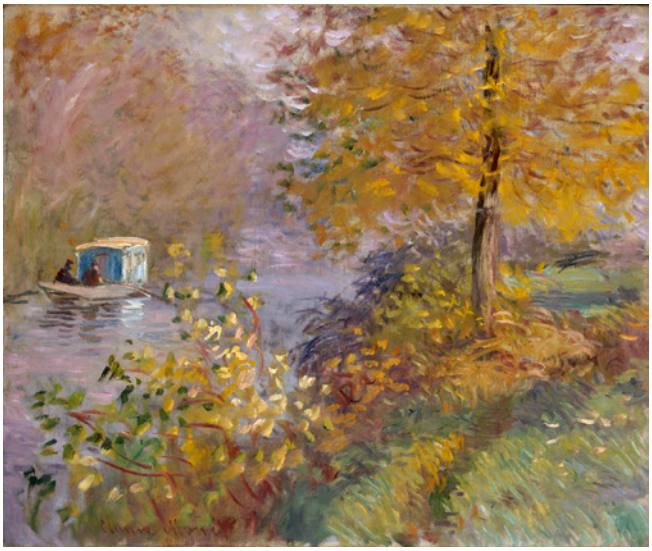
第 2 章
CHAPTER 2

モネのアトリエ舟

1874年 油彩、カンヴァス 50.2×65.5cm　クレラー=ミュラー美術館

© Collection Kröller-Müller Museum, Otterlo, The Netherlands, photo by Rik Klein Gotink

セーヌ川に係留されたアトリエ舟を中央に、奥の岸辺にはアルジャントゥイユの森や遊歩道、建物が描かれています。水面は穏やかで、アトリエ舟や周囲の景色が静かに映り込んでいます。風景画家のドービニー(1817-78)に倣って造られたアトリエ舟は、ボートの上に小屋を設えたもので、モネはこれに乗って川面や水辺の光景を多数描きました。



アトリエ舟 大阪展のみ

1876年 油彩、カンヴァス 54.5×65.3cm
ヌシャテル美術歴史博物館

Legs Yvan et Hélène Amez-Droz en 1979. No. Inv. AP 1658,
© Musée d' art et d' histoire de Neuchâtel (Suisse).

ヴェトゥイユの春

1880年 油彩、カンヴァス 60.5×80.5cm
ボイマンス・ファン・ベーニンゲン美術館

© Collection Museum Boijmans Van Beuningen, Rotterdam.
Loan: Stichting Museum Boijmans Van Beuningen,
Donation: Mevr. E.Y. van Beek-van Hoorn Janssen 1951/
Creditline photographer: Studio Tromp

第 3 章
CHAPTER 3

テーマへの集中
Focusing on One Subject

モネは新たな画題を求めてヨーロッパの各地を精力的に旅しています。拠点とするパリ近郊の村はもちろん、ノルマンディー地方のル・アーヴルやエトルタ、ブルターニュ地方のベリール島、イタリアのボルディゲラ、地中海に面したモナコ、アンティーブなど、制作地は多岐にわたります。地名の多くは作品名に記録されました。こうした旅を可能にしたのは鉄道網の発達です。19世紀フランスではツーリズムが大衆化し、1847年にパリとル・アーヴルが鉄道で結ばれるとノルマンディーは人気の観光地となりました。

モネは旅先に数ヶ月滞在することもあり、集中的に制作しました。賑わう行楽地には関心がなく、人影のない海岸などを好んで描きました。長靴姿で歩き回り、時には険しい岩場に降りるなど危険を冒してまで対象に近づいてイーゼルを立てました。

本章ではノルマンディー地方のプールヴィルの海岸を描いた作品群が展示されます。1882年の作品では断崖などの目立つ造形に着目して描きますが、15年後に再訪した際は、構図はさほど変えず、海や空の天候による変化を主題としています。同じくノルマンディーのエトルタもモネを魅了した土地で、1883年から86年の間に毎年訪れました。本展では奇岩のラ・マンヌポルトを間近に大きく捉えた2点をご紹介します。旅先に滞在中、同じ対象であっても季節や天候、時刻によって、海や空、山や岩肌の表情が絶え間なく変化する様子をモネはカンヴァスに描き留めていきました。

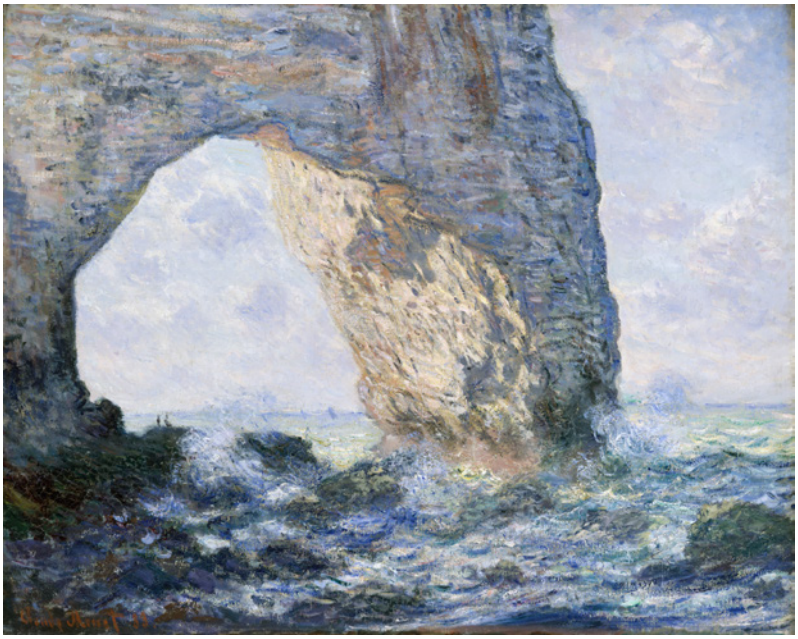
ヴェンティミーリアの眺め

1884年 油彩、カンヴァス 65.1×91.7cm ケルヴィングローヴ美術館・博物館

© CSG CIC Glasgow Museums Collection. Presented by the Trustees of the Hamilton Bequest, 1943

1883年12月にルノワールと旅した地中海沿岸に魅了されたモネは、翌年1月にひとりでこの地を再訪します。画家は輝くような光の下での植物や風景を明るい色彩で捉えようと奮闘し、それまであまり用いなかった青やピンクなども使うようになりました。本作はイタリアのボルディゲラからフランス方面を見た風景で、画面右側にはヴェンティミーリアの街並みが描かれています。

第 3 章
CHAPTER 3



ラ・マンヌポルト(エトルタ)

1883年 油彩、カンヴァス 65.4×81.3cm メトロポリタン美術館

© The Metropolitan Museum of Art.
Image source: Art Resource, NY. Bequest of William Church Osborn, 1951 (51.30.5)

エトルタのラ・マンヌポルト

1886年 油彩、カンヴァス 81.3×65.4cm メトロポリタン美術館

© The Metropolitan Museum of Art.
Image source: Art Resource, NY. Bequest of Lillie P. Bliss, 1931 (31.67.11)

エトルタはノルマンディー地方の切り立った断崖と奇岩で有名な海辺の景勝地です。モネはドラクロワ(1798-1863)、クールベ(1819-77)などがエトルタの奇岩を描いた作品を目にしていましたが、1883年から86年にかけて毎年この地で制作しました。奇岩「ラ・マンヌポルト」をクローズアップ構図で描いたこの2作品は制作年に3年の開きがあり、縦横の違いとともに色遣いにも変化が見られます。

プールヴィルの断崖

1882年 油彩、カンヴァス 60.4×80.9cm トゥウェンテ国立美術館

© Collection Rijksmuseum Twenthe, Enschede (NL) (photography Rik Klein Gotink)

夏の晴天の下、切り立った崖が砂浜と海に青い影を落としています。複雑な陰影をたたえた石灰岩の岩肌は、様々な色彩が用いられることで表情豊かに描かれています。ノルマンディー地方のプールヴィルからヴァランジュヴィルの海岸に見られる断崖や渓谷の景観に魅了されたモネは、1882年のうちにこの地域に2度滞在し、100点もの海景画を残しました。

プールヴィルの断崖

1882年 油彩、カンヴァス 59.0×71.0cm 東京富士美術館

© 東京富士美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

第 4 章
CHAPTER 4

連作の画家、モネ
Series Paintings

1883年春、42歳のモネはヴェトゥイユの下流に位置するセーヌ川流域のジヴェルニーに移り住み、同居していたアリス・オシュデ(1844-1911)に家庭を託して制作に励みました。

モネが体系的に「連作」の手法を実現したのは〈積みわら〉が最初だと考えられています。ジヴェルニーの自宅付近で秋になると目にする風物詩を、当初はありのままに描きますが、1890年前後は集中的に取り組み、複数のカンヴァスを並べて、光を受けて刻々と変化する積みわらの描写を同時進行で進めたのです。配置や遠近の組み合わせを変化させ、陽光を浴びた積みわらは光と影のコントラストが強調され、抽象化していきます。本展に出品される《積みわら：雪の効果》は、1891年5月、デュラン=リュエル画廊で展示された15点の連作のうちの1点です。個展は大好評を博し、その後は〈ポプラ並木〉〈ルーアン大聖堂〉などの連作も生まれました。

1899年からはロンドンを訪れ、〈チャリング・クロス橋〉や〈ウォータールー橋〉などの連作を数年かけて描きました。構図はより単純化し、湿り気のある大気が充満したような画面に建造物の形態が柔らかく浮かび上がります。大まかな筆致で光と大気を緻密に表現し、構図は同じでも一つ一つの作品は個性が際立ちます。

「連作」の着想源の一つにはモネが愛好した浮世絵の影響も指摘されています。モネは歌川広重(1797-1858)の『東都名所』などを所蔵しており、連なる風景表現の新たな可能性を見出したのかもしれません。

ジヴェルニーの積みわら
1884年 油彩、カンヴァス 66.1×81.3cm
ポーラ美術館

モネは1880年代中頃から91年にかけてジヴェルニーのアトリエ周辺で多くの積みわらを描いています。1886年までに描かれた積みわらは家畜の飼料用の干し草の山ですが、1890から91年に「連作」として描かれた積みわらは、脱穀前の麦を積み上げたものです。「連作」では、似た構図の〈積みわら〉が、天候や時間、季節による光の効果の違いによって描き分けられています。

積みわら、雪の効果
1891年 油彩、カンヴァス 65.0×92.0cm
スコットランド・ナショナル・ギャラリー

© National Galleries of Scotland. Bequest of Sir Alexander Maitland 1965

第４章
CHAPTER 4

クルーズ渓谷、曇り

1889年 油彩、カンヴァス 73.5×92.5cm
フォン・デア・ハイト美術館

© Von der Heydt-Museum Wuppertal, photo: Medienzentrum Wuppertal

クルーズ渓谷、日没 東京展のみ

1889年 油彩、カンヴァス 73.0×70.5cm
ウンターリンデン美術館

Photo © Musée Unterlinden, Colmar, France, Dist. RMN-Grand Palais / Christian Kempf / distributed by AMF

テムズ川のチャリング・クロス橋 大阪展のみ

1903年 油彩、カンヴァス 73.0×100.0cm
吉野石膏コレクション（山形美術館に寄託）

チャリング・クロス橋、テムズ川

1903年 油彩、カンヴァス 73.4×100.3cm リヨン美術館

Image © Lyon MBA, Photo Alain Basset, B 1725

第４章
CHAPTER 4

ウォータールー橋、曇り

1900年 油彩、カンヴァス 65.0×100.0cm
ヒュー・レイン・ギャラリー

Collection & image © Hugh Lane Gallery, Dublin (Reg. No. 304)

モネは1899から1901年に3度ロンドンを訪れ、テムズ川に架かる橋や国会議事堂などの連作を手掛けました。その中でもこのウォータールー橋は一番多く描かれた題材で、滞在したホテルからテムズ川下流の方向を見て描かれています。モネはわざわざ霧の深い冬を選んでロンドンを訪れるなど、ロンドン名物の霧を透過する複雑な光の様相を捉えようとしました。

ウォータールー橋、ロンドン、夕暮れ

1904年 油彩、カンヴァス 65.7×101.6cm
ワシントン・ナショナル・ギャラリー

© National Gallery of Art, Washington,
Collection of Mr. and Mrs. Paul Mellon. 1983.1.27

ウォータールー橋、ロンドン、日没

1904年 油彩、カンヴァス 65.5×92.7cm
ワシントン・ナショナル・ギャラリー

© National Gallery of Art, Washington,
Collection of Mr. and Mrs. Paul Mellon. 1983.1.28

第5章
CHAPTER 5

「睡蓮」とジヴェルニーの庭
Water-Lilies and the Garden in Giverny

後半生を過ごしたジヴェルニーはモネの尽きない着想源となります。セーヌ川支流のエプト川が流れる村の風景を四季折々に捉えて描きました。借りていた家と土地を購入し、その後も敷地を拡げて「花の庭」と「水の庭」を本格的に整備し、何人もの庭師を雇って旅先から詳細な指示を送りました。「水の庭」で睡蓮を栽培し、池に日本風の太鼓橋を架けて藤棚をのせ、アヤメやカキツバタを植えました。アメリカや日本から多くの画家やコレクターがモネを訪れています。経済的に安定し、当時まだ珍しかった自動車を購入するなどの贅沢も楽しみました。

モネは庭に咲く藤や牡丹など多彩な草花を描いています。1890年代後半からは300点もの〈睡蓮〉に取り組みました。友人で政治家のクレマンソー(1841-1929)に大型装飾壁画の計画を働きかけ、巨大な専用アトリエを建てて史上最大の〈睡蓮〉を制作しました。この〈睡蓮〉は国家へ寄贈され、今日もパリのオランジュリー美術館で公開されています。

1908年頃からモネは視覚障害に悩まされ、1923年に白内障の手術を受けています。私生活ではエルネスト・オシュデが1891年に没し、未亡人となったアリスと翌年正式に再婚し、1911年のアリスの没後は義理の娘ブランシュが最晩年のモネを支えました。

当初は風景として描かれていた〈睡蓮〉は、次第に視線が水面に集中していきます。視力の衰えとともに筆致はより粗く、対象の輪郭は曖昧になり、色と光の抽象的なハーモニーが画面を占めるようになります。そして大画面を色と光の筆致が覆う晩年の作品群は20世紀半ばの抽象美術家を刺激し、モネ芸術は新たな注目と再評価を受けるのです。

睡蓮
1897-98年頃 油彩、カンヴァス 66.0×104.1cm ロサンゼルス・カウンティ美術館

Los Angeles County Museum of Art, Mrs. Fred Hathaway Bixby Bequest, M.62.8.13
photo © Museum Associates/LACMA

ジヴェルニーでモネが情熱を注いだのは絵の制作とガーデニングでした。池の水面を間近に捉え、まるで大画面の一部のような作品です。赤みを帯びた白い睡蓮が豊かな花弁を広げ、切れ込みのある円い葉とともに池に浮かんでいます。クローズアップした構図を素早く粗い筆致で捉え、青や紫などさまざまな色を使って活き活きと描かれています。

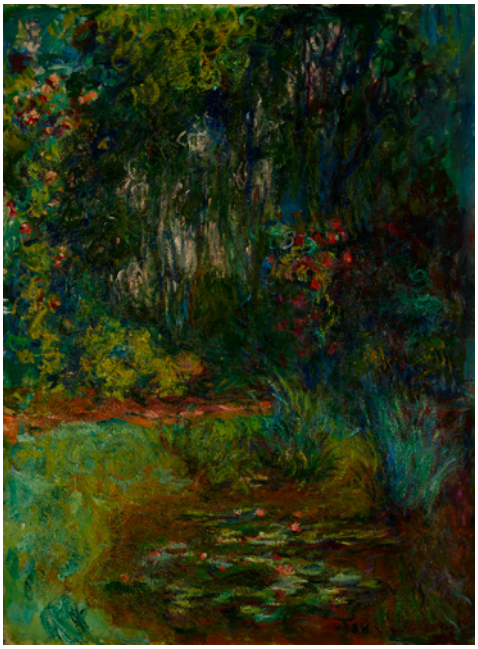
第５章
CHAPTER 5

ジヴェルニーの風景、雪の効果

1886年 油彩、カンヴァス 65.0×81.0cm
ヘヒト美術館
© Courtesy of the Hecht Museum, University of Haifa, Israel.

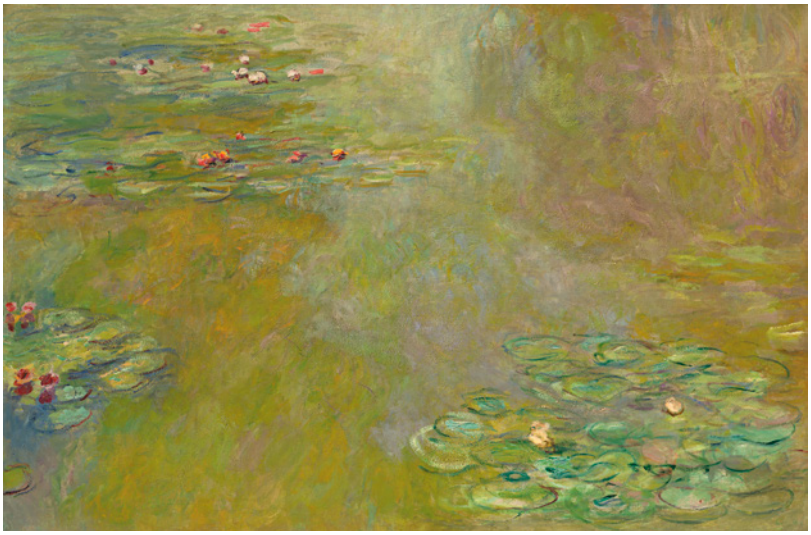
睡蓮の池 大阪展のみ

1907年 油彩、カンヴァス 100.6×73.5cm
石橋財団アーティゾン美術館



睡蓮の池の片隅 東京展のみ

1918年 油彩、カンヴァス 119.5×88.5cm
ジュネーヴ美術歴史博物館
© Musée d'art et d'histoire, Ville de Genève, photographe : Bettina Jacot-Descombes



睡蓮の池

1918年 油彩、カンヴァス 131.0×197.0cm
ハッソ・プラットナー・コレクション
© Hasso Plattner Collection

庭の樹々や空の雲が、まるで鏡像のように池の水面に映し出され、その色と形が睡蓮の花や葉と交じり合い、明るく暖かな色彩の見事な調和が構成されています。遠景になるほど光の量は増し、池の片隅に立って制作するモネの眼と、絵を見る私たちの眼が重なります。視覚障害を患いながらも制作に打ち込んでいた晩年の大作の一つです。

コラム
COLUMN

クロード・モネの連作に至る経緯、連作の定義

クロード・モネの86年にわたる生涯はいくつかの伝説に彩られています。なかでも印象派の創始者にして代表者であるという伝説は最大のものかもしれません。技法・手法の面で有名になった伝説のひとつが「連作」です。

初期の1860年代や70年代は、近代化されつつあるパリの街景や変貌しつつある郊外の情景を熱心に描きました。1880年代のモネはフランス各地を北から南まで盛んに旅行をし、各地の名所旧跡をとりあげます。モネがセーヌ下流のジヴェルニーに居を移すのは1883年4月です。43歳になる年のことでした。80年代末にジヴェルニー周辺の田園風景などのフランスの伝統的な主題(テーマ)を選ぶようになりました。〈積みわら〉はジヴェルニーのモネの家の周りにある農村の見慣れたモティーフ(題材)のひとつです。

モネは1890年の夏の終わりから翌年の早春にかけて積みわらをモティーフにした25点の作品を制作します。そして、翌91年5月にそのうちの15点を選んで画商デュラン=リュエルの画廊で個展を開きました。この個展は大好評で作品はほとんど売却されました。モネは続いて、ポプラ並木と、ルーアン大聖堂の正面をモティーフとした、一連の作品を制作します。

これらの作品は「連作」として有名になります。英語で「シリーズ(series)」、仏語で「セリー(série)」と呼ばれる連作は、教会などに描かれた聖者の生涯とか季節ごとの農作業を描いた月暦画などを指すことが多いのですが、1890年から92年にかけて制作された連作にはモネ独自の意味が込められています。描く対象(モティーフ)と描く視点を限定し、異なった天候と時間の変化を画面に定着しているのです。次のような魅力的な逸話も連作の伝説を生み出すのに寄与しています。ある日の午後、積みわらに当たる光の反映を描いていたら、光の効果はすぐに変化してしまいました。そこで義理の娘のひとりに、家から別のカンヴァスを持ってくるように頼み、午後が過ぎるうちに積みわらの連作が出来上がっていた、というものです。

しかし、実際には、モネはこれらの現場で描いた習作をアトリエに持ち帰り時間をかけて完成させています。積みわらというモティーフも偶然見つけたものではなく、フランスの田園が誇る伝統的な富の象徴であることを表現したものでした。

ほぼ同じモティーフを異なった天候と時間の下に描くというモネ特有の連作の例は、〈積みわら〉連作の直前に取り組んだ作品に見ることができます。《クルーズ渓谷、曇り》と《クルーズ渓谷、日没》です。また、同じ主題によって緩やかに結び付けられる作品群も、モネ特有の連作の予備的なものとみなすことができます。初期の《ルーヴル河岸》も万国博覧会開催中のパリの情景を描いた3点組の一点です。1870年代に制作したアルジャントゥイユの風景画群もそうした例に数えられます。

モネは20世紀に入ってから新しい連作を始めます。ジヴェルニーの庭に自ら作った池に浮かべた睡蓮の連作です。その間に、ロンドンとヴェネツィアに旅行しますが、その2都市で描いた都市風景も連作と言えるでしょう。テムズ川に掛かるチャリング・クロス橋とウォータールー橋はそれぞれがほぼ同じ構図だが、精妙な色彩によって描き分けられています。

島田紀夫(本展日本側監修)　SHIMADA NORIO

1940年、山梨県生まれ。実践女子大学名誉教授。山梨県立美術館館長、ブリヂストン美術館(現・アーティゾン美術館)館長などを歴任。
主な著書に「印象派と日本人」「印象派の挑戦」「セーヌで生まれた印象派の名画」など。共著・監修多数。

開催概要
EVENT OUTLINE

モネ
連作の情景
MONET

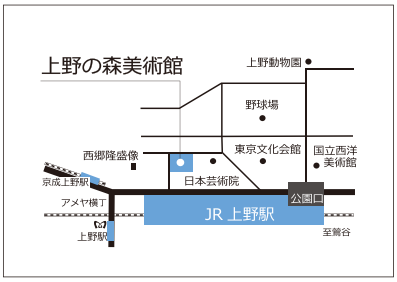
東京展

産経新聞創刊90周年・フジテレビ開局65周年事業

展覧会名	モネ　連作の情景
英語展覧会名	Claude Monet: Journey to Series Paintings
会期	2023年10月20日(金)～2024年1月28日(日)
会場	上野の森美術館

※休館日、開館時間、入場料など詳細は決まり次第、公式サイト等で発表いたします。

主催	産経新聞社、フジテレビジョン、ソニー・ミュージックエンタテインメント、上野の森美術館
企画	ハタインターナショナル
特別協賛	にしたんクリニック Nishitan Clinic
協賛	第一生命グループ、NISSHA
協力	KLMオランダ航空、日本航空、ルフトハンザ カーゴ AG、ルフトハンザ ドイツ航空、ヤマト運輸
監修	ベンノ・テンペル(デン・ハーグ美術館館長)
監修協力	マイケル・クラーク(前スコットランド・ナショナル・ギャラリー館長)
日本側監修	島田紀夫(実践女子大学名誉教授)
展覧会公式サイト	www.monet2023.jp



上野の森美術館

〒110-0007 東京都台東区上野公園 1-2
https://www.ueno-mori.org/
JR上野駅公園口より徒歩3分
東京メトロ・京成電鉄 上野駅より徒歩5分

報道関係お問合せ

「モネ 連作の情景」広報事務局(OHANA内)※東京展
〒102-0074 東京都千代田区九段南1-5-6 りそな九段ビル5F
TEL:03-6869-7881　Fax:03-6869-7801　Email:monet2023@ohanapr.co.jp

開催概要
EVENT OUTLINE

モネ
連作の情景
Claude Monet: Journey to Series Paintings
MONET

大阪展

カンテレ開局65周年・産経新聞創刊90周年事業

展覧会名	モネ　連作の情景
英語展覧会名	Claude Monet: Journey to Series Paintings
会期	2024年2月10日(土)～5月6日(月・休)
会場	大阪中之島美術館 5階展示室

※休館日、開館時間、入場料など詳細は決まり次第、公式サイト等で発表いたします。

主催	大阪中之島美術館、関西テレビ放送、産経新聞社
企画	ハタインターナショナル
特別協賛	にしたんクリニック Nishitan Clinic
協賛	第一生命グループ、NISSHA
協力	KLMオランダ航空、日本航空、ルフトハンザ カーゴ AG、ルフトハンザ ドイツ航空、ヤマト運輸
監修	ベンノ・テンペル(デン・ハーグ美術館館長)
監修協力	マイケル・クラーク(前スコットランド・ナショナル・ギャラリー館長)
日本側監修	島田紀夫(実践女子大学名誉教授)
お問合せ	06-4301-7285(大阪市総合コールセンター)　受付時間8:00～21:00(年中無休)
展覧会公式サイト	www.monet2023.jp

大阪中之島美術館
NAKANOSHIMA MUSEUM OF ART, OSAKA

〒530-0005 大阪市北区中之島4-3-1　https://nakka-art.jp

京阪：中之島線 渡辺橋駅(2番出口)より南西へ徒歩約5分、淀屋橋駅(7番出口)より土佐堀川を越え西へ徒歩約15分
Osaka Metro：四つ橋線 肥後橋駅(4番出口)より西へ徒歩約10分
御堂筋線 淀屋橋駅(7番出口)より土佐堀川を越え西へ徒歩約15分
JR：大阪環状線 福島駅／東西線 新福島駅(2番出口)より南へ徒歩約10分、大阪駅より南西へ徒歩約20分
阪神：福島駅より南へ徒歩約10分、大阪梅田駅より南西へ徒歩約15分
阪急：大阪梅田駅より南西へ徒歩約20分
バス：大阪シティバス　JR大阪駅前より53号・75号系統で「田蓑橋」下車、南西へ徒歩約2分
＊お帰りのJR大阪駅方面の便利なバス停は「渡辺橋」になります。